

〈論文〉

# 文構造に対する認識を踏まえた指導 (1) — 中学における制限的關係代名詞を中心に —

日 高 俊 夫\*

## 要 旨

主に中学校における關係代名詞の指導について論じる。具体的には、日本語の連体節と英語の關係代名詞節の対応關係を整理した上で、学習者が理解すべきことを整理し、それを理解させ、習得を促すための具体的教授モデルを提示する。また、最近変化してきていると考えられる現代英語における關係代名詞の用法や中高接続の観点から、本論の教授モデルの妥当性を議論する。

**キーワード**：關係代名詞 (節)、連体節、空所 (Gap)、項、名詞句

## 1 はじめに

本論は、特に中学における關係代名詞の習得に第一義的な焦点を当てて、關係代名詞の習得 (学習) 過程において学習者が理解・習得しなければならない事項をあぶり出し、理解・習得を促すための教授モデルを提示することを目標とする。

具体的には、第2節で日本語の連体節と英語の關係代名詞節の対応について論じ、それを踏まえて、第3節で学習者が理解すべきことを提示する。そして第4節で具体的な教授モデルを提示し、第5節で現代英語の文法・語法および高校との接続と、本教授モデルの関連を議論する。

---

\* ひだかとしお、九州国際大学現代ビジネス学部、t-hidaka@cb.kiu.ac.jp

本論と同様に、名詞修飾節の日英語対照を行うことにより関係代名詞の習得への道筋を示した片桐・田路(2018)は、日本語の名詞修飾節と英語の関係詞節の統語構造の違いを通時的変遷も踏まえて指摘し、習得させるべきことについて論じている。本論も基本的に片桐・田路(2018)と同様の立場に立つが、共時的により詳細な分析と、実際の現場でも利用可能な具体的指導モデルを提示することを目標とする。

## 2 日本語の連体節との関連から見る問題点

日本語の表現に対応する英語表現を考える際に、関係代名詞を用いるべき日本語表現は、いわゆる連体節の一部を占めると考えられる。日本語教育の分野において、田丸・吉岡・木村(1993)が「普通の発話で名詞修飾のために連体修飾節が要求される環境は英語の関係代名詞の場合よりはるかに多いようである」と述べていることからこのことがうかがわれる。また、第2言語としての日本語における連体節の習得研究について述べた齋藤(2002)の定義に基づけば、英語の関係節に対応する日本語の節は連体修飾節の真部分集合を成すと言える。

以上のことから、日本語の連体節を英語で表現する際に、そのすべてを関係代名詞を用いて表現するのは困難であると考えられるので、学習者はともかくとしても、指導者の側はその対応関係のある程度明確かつ正確に認識した上で指導を行う必要があると言えるだろう。

本節では、議論の皮切りとして、日本語の連体節と英語の関係節の対応を考える。具体的には、寺村(1975)に基づいて日本語の連体節を整理することにより、英語の関係代名詞の習得を目指す学習者やその教授者が遭遇する可能性のある問題点について考えていきたい。

寺村(1975)は、連体修飾における修飾節と被修飾名詞の関係を「内の関係」と「外の関係」に分類し、さらに後者を「ふつうの内容補充」と「相対的内容補

充」に細分化している。まず、「内の関係」とは、(1)に示されるように、被修飾名詞に「が」「を」「に」のような格助詞をつけて修飾部の用言と結びつけることができる関係のことを指す((1)～(3)の例文は寺村(1975)による)。

- (1) a. さんまを焼く男 → 男がさんまを焼く。  
b. 女房が近所の者から聞いた話  
→ 女房が(その)話を近所の者から聞いた。

これらのような「内の関係」は、英語で表現する場合、関係代名詞節を用いて問題なく表現できる場合も多いと思われる<sup>1</sup>(ただし、後述するような問題もある)。

一方「外の関係」ではそのような関係が成り立たず、被修飾名詞にどのような格助詞をつけても(1)のように表示できない。寺村の言葉を借りれば、被修飾名詞が「どこか外から来たものだとしか言えない」ものである。

「外の関係」の中の「ふつうの内容補充<sup>2</sup>」とは、被修飾名詞がどんなものであるかという「内容」を表すもので、次のようなものが例として挙げられる。

- (2) a. さんまを焼く匂い → \*匂い{が/を/に}さんまを焼く。  
b. 女房の幽霊が、三年目になってようやくあらわれる話  
→ \*話{が/を/に}女房の幽霊が、三年目になってようやくあらわれる。

(2)を英語で表現する場合には、関係代名詞を用いて直訳的に表現することは難しく、the smell of grilling sauriesや the story that... のようないわゆる同格的表現等を用いるのが一般的であろう。

「相対的補充」とは、(3)に示されるように「前↔後」「前日↔(当日)↔翌日」「原因↔結果」のような「相対的内容を直ちに連想させる名詞」の内容を補充するような修飾関係のことを指す。

- (3) a. たばこを買ったおつり  
b. 上役とけんかした帰り  
c. 火事が広がった原因

寺村(1980)では、英語には相対的補充に対応する修飾形式を見出すことが一般に難しいと述べているが、(3c)にあたる英語は次のように関係副詞を用いて表現することができる<sup>3</sup>。

- (4) the reason why the fire spread

ただし、英語の関係副詞は where, when, why, how しかないので、被修飾名詞(先行詞)がそれぞれ関係副詞節の述語動詞句が表す行為等の起こった「場所」「時」「理由」「方法<sup>4</sup>」を表す場合にしか用いることができない。したがって、それ以外の内容についての相対的補充表現を英語にするためには関係副詞以外の方法を用いる必要がある。例えば、(3a)は the change I got when I bought cigarettes、(3b)は on my way home after quarreling with my boss のような、日本語から考えればある意味迂言的な英語表現となるだろう。

以上、「外の関係」の多くは関係詞を用いて表現し難いことを確認したが、(5)が示すように、日本語の表現には「内の関係」と「外の関係」で曖昧性を示す例も多く存在する。

- (5) a. ケンが聞いた知らせ→(その)知らせをケンが聞いた(内の関係)  
b. ケンが優勝した知らせ→(その)\*知らせ{が/に/を}ケンが優勝した  
(外の関係)

同じ「知らせ」に対する連体修飾でも、(5)をそれぞれ英語で表現する際、(5a)は関係代名詞を用いて表現可能だが、(5b)は不可能で、いわゆる同格の that

節を用いるのが通常のやり方だろう。この違いは、連体節の「ケンが聞いた」には「聞いた」の目的語が表現されていない、つまり空所 (gap) が存在しており、「知らせ」が解釈上その空所 (ここでは目的語) を埋めることができるのに対して、「ケンが優勝した」には同様の関係が読み取れないことによって説明される。したがって、学習者が関係代名詞を正確に使用するためには、この空所の存在と、空所と関係代名詞 (あるいは先行詞) の妥当な意味的・統語的關係が判断できなければならないことになる。

しかしながら、英語は基本的に主語や目的語を明示しなければならないので、文内のあるべき場所にそれらが表現されていない場合には空所の存在を認識しやすい一方、日本語は必ずしも主語や目的語等が明示されない場合も多い。したがって、与えられた日本語に相当する英文を学習者が作成しようとする場合、連体節中の空所の存在の有無を正確に判断するのは、指導者側が考えているほど容易ではないことが推察される。

また、英語の関係代名詞節と被修飾名詞の関係がwh移動に下支えされた純粹な文法関係によって成り立っているのに対して、明示的な関係代名詞を持たない日本語の場合、連体節と被修飾名詞は統語的というよりも、意味論的・語用論的にとっても緩やかな結びつき方をしている (片桐・田路 2018) ために (6)、(7) のような曖昧性が生じる。

(6) ケンが話していた女性

(7) ケンが喧嘩していた話

これらには少なくとも次のような解釈の曖昧性がある。

(8) (6) の曖昧性

- a. ケンがある女性について話していたのだが、その女性本人
- b. ケンがある女性と話していたのだが、その女性本人

(9) (7) の曖昧性

- a. ケンが誰かとある話をめぐって喧嘩していたのだが、その喧嘩の原因となった話
- b. ケンが誰かと喧嘩していたという話

(6) は talk と関係代名詞 who(m) を用いて英語で表現できるが、(8) に示すそれぞれの解釈に応じて前置詞として about, with (もしくは to) のいずれを用いるかを文脈や場面から判断する必要がある。また、(9a) の解釈の場合、(6) と同様の空所を読み込み、(9b) の解釈では空所のない「外の関係」であることを確信する必要がある。

以上のことから、日本語の連体修飾節との関連において英語の関係代名詞を習得・教授する際には少なくとも次の問題点が考えられる。

- (10) a. 関係代名詞節を用いて英訳可能な日本語表現の集合と日本語の連体節の集合は一致せず、前者が後者の部分集合を成す。したがって、学習者は「日本語のどんな連体節に対して関係代名詞を用いるべきか」を意識的・無意識的に理解・判断した上で関係代名詞を適切に用いる必要がある。
- b. 関係代名詞節には空所が存在するが、日本語では主語や目的語等が必ずしも明示されないため、日本語の表現からは、少なくとも学習者には空所の有無の判断が難しい。
- c. 日本語の連体修飾は、英語の関係代名詞節と異なり、被修飾名詞と厳格な文法関係を持つというよりも意味論・語用論に基づくゆるやかな結びつきに支えられているため、意味解釈に曖昧性がある例も多い。そのような例を関係代名詞を用いて英語にしようとする場合、学習者は文脈等によって文法関係を明確に理解した上で対応する英語の表現を考える必要がある。

### 3 關係代名詞節の役割と構造 — 学習者が理解すべきこと

#### 3.1 後置修飾による情報付加と名詞句の形成 — 教科書・参考書の記述を通して

關係代名詞節は先行詞となる名詞を後ろから修飾するわけであるから、当然のことながら、關係代名詞節は形容詞の働きをし、先行詞と關係代名詞節が合わさって全体として(大きな)名詞句を作る。そして、この「大きな名詞句」が文中において主語や目的語等の位置を占めることになるのだが、これまでに中高生を含む多くの学生に指導者として関わった実感として、「修飾」の概念に関しては、学習者はある程度理解できるものの、「名詞句のまとめ」と「その名詞句が、主語や目的語などの名詞句が占める然るべき文中の位置に挿入される」という点に関しては、そのことをしっかりと認識できている学習者は比較的少ないように思う。

英語や日本語で書かれている英語学習のための一般的な文法書等を見ても、「修飾」についての言及は存在するものの、「名詞句をつくる」ということを分かりやすく明記しているものは少ないように思われる。まず、英語の文献を見てみる。

(11) RELATIVE CLAUSES are typically found after a NOUN PHRASE and provide some information about the person or thing indicated by that noun phrase. They are sometimes called ‘adjective clauses’ because, like many adjectives, they often describe and help to identify the person or thing being talked about. (Yule 1998, 240, 下線は筆者)

(12) Clauses beginning with question words (e.g. who, which, where) are often used to modify nouns and some pronouns – to identify people and things or to give more information about them. These are called ‘relative clauses’. (Swan 2016, Section 21冒頭, 下線は筆者)

(13) ...Here, as in most relative clauses, the antecedent is the preceding part

of the noun phrase in which the relative clause functions as modifier:

[the book [which you ordered last month]]

(Quirk, *et al.* 1985, 365, 下線は筆者)

Quirk, *et al.* (1985) は「先行詞は関係詞節が修飾してつくる名詞句の先頭に立つ」としているの、「名詞句のまとめり」に関しての言及があると言えるが、Yule (1998) およびSwan (2016) は、修飾や先行詞で表される名詞の同定 (identify) といった意味機能的側面は言及しているものの、「全体として名詞句を作る」ことは明記していない。

このような英語の文献を参照する日本人学習者は、それなりに英語に興味を持ち、習熟度も比較的高い生徒・学生であると考えられるので、ことさら「名詞句」を強調する必要はないかもしれない。そこで日本語で書かれた文献をいくつか見てみよう。

まずは教科書である。『New Horizon English Course 3』(p.85) では、いわゆる接触節<sup>5</sup> (This is a book I brought from home. (p.83)) を導入した後に、「基本本文」として (14a) を用いて関係代名詞を導入し、その横に (14b) の説明が記されている。

(14) a. Deepa is a student **who** likes music very much.

b. 関係代名詞 **who**

人について説明を加えるときは、関係代名詞の **who** を使う。基本本文の a student who... は「音楽が大好きな生徒」という意味になる。

「人について説明を加える」ということで「修飾」であることは理解できるかもしれないが、英語において a student 以下の部分がひとまとまりの名詞句になっていることは分かりにくいのではないか。また、少なくとも教科書の中では、これ以降の「基本本文」では関係代名詞を含む名詞句が主語になっている



例は提示されておらず、本文中で A great number of people who joined it were killed. および The world that she wants may not come easily, but... という文が提示されている(このことに関する問題点は後述する)。

『学研パーフェクトコース英語』では、基本的に2文を關係代名詞を用いて結合する方法を導入部で提示しており、後置修飾に関しては、I have a book that is good for a day trip. という例を交えて比較的詳しく説明しているが、やはり「先行詞以下が1つの名詞句を成す」ことは明示されていない。

本論の重要な目的の1つは、中高の接続も視野に入れた指導法の提示であるので、高校生が使用する可能性の比較的高い文法に関する学習参考書を見てみよう。

『Depth 総合英語』は次のような記述や例文で説明しており、2文を結合して1文にする方法を基本としている。

(15) a. 關係詞は、ある名詞のもっと具体的な内容を表すための文を、その名詞につなげるための単語。

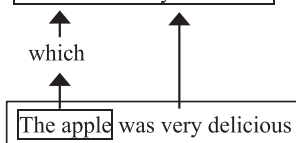
b. 關係詞には、關係代名詞と關係副詞がある。

c. I ate an apple. + The apple was very delicious.



d. 具体的な内容を表す文の中で、前に出てきた名詞と同じ名詞を關係詞に置き換えて、2つの文をつなぎます。

I ate an apple which was very delicious .



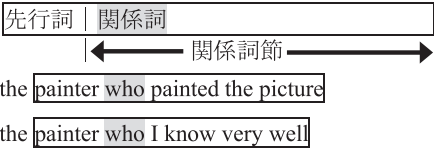
私はとてもおいしいリンゴを食べた。

(『Depth 総合英語』 p.153)

ここでも修飾部である which 以下が四角で囲まれており、an apple を含む名詞句全体を視覚的に把握することは難しいと思われる。

『高校英語総合Harvest』においても、修飾についてはかなり詳しく説明されているが、名詞句全体を把握するような記述は、視覚情報も含めて存在しないように思われる。

『ジーニアス総合英語』は、関係詞の導入部で後置修飾や関係詞節、先行詞の説明を行い、次のような図や例文によって先行詞を含む名詞句そのものを提示し、目的格の関係代名詞の場合には空所の概念に相当する説明を与えている。

- (16) 
- the painter who painted the picture
- the painter who I know very well
- (『ジーニアス総合英語』 p.293)

本論は「名詞句の把握」が重要であると考えるので、基本的に『ジーニアス総合英語』と同様の立場を採り、そのための具体的指導方法を提案する。

次に、主に教える側の教員が参考にする可能性の高い綿貫・ピーターセン (2006) を見てみよう。

- (17) a. 文中の名詞を形容詞節で修飾するには、その名詞に代わる代名詞と接続詞の働きを兼ねる関係代名詞か、副詞と接続詞の働きを兼ねる関係副詞を用いる。

- b. 「男の人が私たちの方へやってきました」と「彼を知っていますか?」という2つの文を1つの英文にまとめるのに、関係代名詞 (who) を次のように使うことができる。

A man is coming toward us. Do you know him?

→ Do you know the man who is coming toward us?

この場合、whoは下線部の節の主語であると同時に、この節を前のmanに結びつけて修飾している。つまりwhoはmanという名詞の代わりをしながら、2つの節を結びつける接続詞の役割も果たしている。これが關係代名詞である。

(綿貫・ピーターセン 2006, 259)

ここでも名詞句のまともは見えにくいと思われる。また、元の文では不定冠詞aのついた名詞句(a man)が、關係代名詞を用いた例では定冠詞theのついたthe manに変わっている。また、通常の指導ではおそらく代名詞の方を關係代名詞に変えることがひろく行われると思われるが、ここでは代名詞のhimではなくA manがwhoに変わっているように読まざるを得ない。以上のことにより、「2つの文をどうつなぐか」が学習者にとっては非常に分かりにくくなっているように思われる。

以上のように、『ジーニアス総合英語』以外の教科書や参考書の記述からは「被修飾名詞(および冠詞)と關係代名詞節を含む名詞句全体」を学習者に把握させようとする態度が希薄であることがうかがわれる。したがって、実際の授業ではその部分を学習者が把握できるような配慮や方策が求められると考えられる。

### 3.2 空所と項構造の認識

第2節で、日本語の連体節には空所を含むものとそうでないものがあり、連体節と被修飾名詞は意味論的あるいは語用論的なゆるやかな関係性を基盤として結びつくことを確認した。また、關係代名詞節には必ず空所が存在するので、学習者は表現すべき意味内容がその構造にマッチするか否かを判断した上で關係代名詞節を用いる必要があるが、日本語は主語や目的語等を明示しないことも多いので、日本語の表現からは、そもそもその判断が難しいことも併せて指摘した。

このような状況の中で、学習者が関係代名詞節を少なくとも文法的に適切に用いるための条件の1つは、「英語の関係代名詞節には空所が存在する」ことを認識することであろう。空所を認識するためには、動詞や前置詞の項構造と、英語においてはそれらの項の表出が基本的に義務的であることを理解しておく必要がある。例えば(18)は、日本語では主語も目的語も必ずしも明示する必要がないが、英語はそれが基本的に必須であることを示している。

(18) a. 愛してる(よ)。

b. I love you.

したがって、まず学習者は次のような例は(18a)の日本語の意味を表す英語の文としては不適切であることを理解する必要がある。

(19) a. \*Love.

b. \*I love.

c. \*Love you.

このような「英語における項構造と項の表出の義務性」に関する知識や感覚を身につけていれば、空所を伴う関係代名詞節の構造理解に関しても一定の効果があると考えられる。

以上、本第3節では、関係代名詞の習得において学習者が理解する必要のあることとして次のことを挙げた。

(20) a. 後置修飾による情報付加

b. aに伴う「名詞句のまとまり」の把握

c. 「空所の存在」の認識

d. cを下支えするための「動詞や前置詞の項構造の認識」

次節では、以上のことを踏まえた具体的な教授方法を提案する。

#### 4 教授モデル—情報付加と名詞句の形成および格の理解を目指して

関係代名詞の導入の際に従来からよく用いられているのが、(21a) と (21b) を結合すれば (21c) のようになるとするものであろう (例文は金谷 (2007) による)。

- (21) a. Nancy gave John a book.
- b. Her uncle wrote a book.
- c. Nancy gave John a book that her uncle wrote.

しかしながら、この指導方法には問題が多いことが中岡 (2006)、金谷 (2007)、宮木 (2013) 等で論じられおり、本論も同じ立場に立つ。詳しい議論についてはそれらの研究を参照されたいが、本論では金谷 (2007) と中岡 (2006) の主張を紹介しておく。

- (22) 特に関係代名詞の導入を中学で「2文結合」という形で解説されている生徒にとっては、関係代名詞が節による後置修飾のためのものであるという理解が出来ていないことが多々あります。(21a) と (21b) をいっしょにすると、(21c) のようになるのだ、というのが2文結合による関係代名詞の導入です。このように習うと、生徒は、関係代名詞というのは2つの文を繋ぐときに用いられる何やら不思議なものと誤解してしまいます。節による後置修飾の例であることを説明してあげる必要があるのです。  
金谷 (2007, 例文番号および記号は筆者による)

- (23) 関係代名詞の働きの本質は名詞修飾のマーキングである。2文連結の扱いが繰り返して強化されても、そのことは関係代名詞の後に続く部分が修

飾の働きを持つということの認識には直接結び付かない。2文連結の練習問題ができるからといって、関係代名詞を含む長文の読解力や表現力を保証できるというわけではない。（中岡 2006）

2文結合の利点としては、修飾する側の文を英文で提示するので、関係代名詞として機能する代名詞の格がそこに明示されているためどの格の関係代名詞を用いるべきかが比較的分かりやすいということはあると思われる。しかしながら、これは（わざわざ）2文を結合しなければ不可能であるわけではない。また、実際の現場で格関係についてどの程度丁寧に指導されているかという問題もあり、その指導が不十分な場合、関係代名詞は文を接続するもの（つまり接続詞と同じ）との誤った認識がなされる危険性が高いように思われる。さらに、中岡の指摘通り、2文結合<sup>6</sup>の練習問題ができることと、関係代名詞を用いた文を正確に理解したり、（関係代名詞を使うべきか否かという問題を含めて）関係代名詞を用いて正確な英文を作るということとの間には、依然として大きな隔たりがあると思われる。何よりも大きな問題は、金谷（2007）や中岡（2006）が指摘する「修飾」の機能に伴う「被修飾名詞を含む名詞句のまとめ」（本論3.1節）が把握しにくいことであり、このことが関係代名詞節の習得を難しくしている大きな要因の1つであると思われる。

以上のことを踏まえて、本論では、以下のような具体的導入プロセスを提案する<sup>7</sup>。

まず、学習者に対して、学習の目的と関係代名詞の働き、そしてそれを用いた「名詞句」の作り方として次のようなモデルを提示する。

(i) a. 学習の目的：関係代名詞の働きを理解し、それを含む大きな名詞（句）、さらに文を作れるようになること。

b. 関係代名詞の働き：「私が昨日会った 男の子」のように、名詞に「詳しくする文」をくっつけて「大きな名詞」を作る働きを

する。

(ii) 「大きな名詞句」の作り方(主格、目的格の關係代名詞)

【Step 1】

詳しくしたい名詞と、それと同じものを指す代名詞が含まれる文をそのままくっつける。

- the boy + *he* came here yesterday → the boy *he* came here yesterday
- the boy + I met *him* yesterday → the boy I met *him* yesterday

【Step 2】

(代名詞は文を名詞にくっつける働きがないので) 変身させて名詞(先行詞)の後ろにくっつけて「大きな名詞(句)」を作る。

- the boy ~~who~~ he came here yesterday 昨日ここに来た少年  
先行詞 = the boy *who* came here yesterday
- the boy ~~whom~~ I met ~~him~~ yesterday 昨日私が会った少年  
先行詞 = the boy *whom* I met yesterday

この *who* や *whom* を「關係代名詞」と呼ぶ。

上の例から分かるように、もとの代名詞の形に応じて關係代名詞の形が違う。

もとの代名詞の形	關係代名詞の形
he, she, they (～は/が: 主格)	→ <b>who</b> (主格)
him, her, them (～を/に: 目的格)	→ <b>whom</b> (目的格)

ここでは敢えて主格と目的格(先行詞は人)の両方を提示している。その方が、關係代名詞の「格」の概念が代名詞と同様に重要であることが理解しやすいと思われるためである。また、これも敢えて目的格の關係代名詞として、*who* や *that* ではなく *whom* を提示しているが、それも格の概念を理解させるためであり、対応する代名詞との形態的類似性を示すことにより、その対応に目を向けさせる効果を持つと思われるためである(現実の使用実態等に伴う問題に関しては後述する)。

次に、この方法を用いたパンプラクティスを行う。具体的には次のような例が考えられる。

(iii) 例を参考に、下線部の代名詞を関係代名詞に変えて「大きな名詞句」を作り、和訳しましょう。

例) a teacher + I know him very well. → a teacher **whom** I know well.

私がよく知っている先生

① the boy + I met him yesterday. → \_\_\_\_\_

和訳 \_\_\_\_\_

② the girl + I met her yesterday. → \_\_\_\_\_

和訳 \_\_\_\_\_

③ the boy + he visited me yesterday. → \_\_\_\_\_

和訳 \_\_\_\_\_

④ the woman + she visited me yesterday. → \_\_\_\_\_

和訳 \_\_\_\_\_

(iii) のような練習によって、関係代名詞の機能が「先行詞と同一指示を持つ代名詞を含む文の修飾による大きな名詞句の形成」であることを学習者は理解しやすくなると考えられる。なお、この導入より以前に、(18), (19) を使って指摘したような「項の認識」を学習者が備えていることが望ましいが、このように、関係代名詞は文中の代名詞が名詞修飾のために変性したものであるとの認識が得られれば、代名詞の存在が前提となり、文作成の際に学習者はその代名詞を補って考えることになるので、たとえ項の認識が十分に備わっていなかったとしても学習は対応できるのではないだろうか。

関係代名詞の機能を理解できたら、次に、(iii) で作った名詞を文に挿入する練習 (iv)、(v) を行う。



(iv) (iii) で作った大きな名詞句を使って、例を参考に英文を作りましょう。

例) 彼は、私がよく知っている先生です。

He is a teacher whom I know well.

私がよく知っている先生が私をパーティに招待してくれました。

A teacher whom I know well invited me to the party.

- ① 君は私が昨日会った男の子を知っているの? \_\_\_\_\_
- ② 私が昨日会った女の子は親切だったよ。 \_\_\_\_\_
- ③ 昨日私を訪れた男の子は私に本をくれた。 \_\_\_\_\_
- ④ 私は昨日私を訪れた女性と2時間話した。 \_\_\_\_\_

(v) (iv) の英文を日本語だけを見ていつでも書けるようになりましょう。

以上のような練習を通して、学習者は次のようなことが理解できると思われる。

- (24) a. 関係代名詞は先行詞と同一指示を持つ空所を含む文による名詞修飾の機能を持つ。
- b. 関係代名詞節は先行詞と共に「大きな名詞句」を作る。
- c. 関係代名詞には代名詞と同様の「格」を持つ。
- d. 関係代名詞節を伴う名詞句は通常の名詞句と同様に文中の主語や目的等の位置に挿入される。

特に、(24b) における「名詞句の把握」ができれば、文構造として著しく誤った文を作る確率は低くなると考えられる。

(v) ができれば、次は(vi) のような英作文に取り組む。

(vi) 次の日本語の「大きな名詞句」を四角で囲んだ上で、文全体を関係代名詞を使った英語で表現してみましょう。

- ①あなたは昨日ここに来た女性を知っているのですか？
- ②昨日ここに来た女性は私のおばです。
- ③私は、小学生の時に好きだった女の子に来週会う予定です。

以上のようなプロセスを経ることにより、「空所のある節を伴って先行詞と共に大きな名詞句を作る」という関係代名詞の機能と関係代名詞節の構造、および関係代名詞節を含む文の作成について、少なくともいわゆる2文結合方式よりも容易に理解および習熟させることができると考えられる（関係代名詞whichについても同様のプロセスが可能である）。

本来存在すべき文中の場所に代名詞がなく、その代わりにそれが関係代名詞として先行詞の直後に置かれているという英語の構造そのものを提示し、それを理解させることが有効な理由が少なくとも2つある。1つは、そのような提示および指導によって「(必ずしも項が明示されない)日本語を直接的手がかりとして空所を認識する」という困難を避けることができるということ、そしてもう1つは、空所が存在しない日本語の連体節との違いに対する気づきを促すことができるということである。日本語のある連体節に相当する英文作成の途中で、当該英語表現において、被修飾名詞と同一指示を持つ代名詞が修飾節中に存在し得ず、結果として空所も存在しないことが認識できれば、その連体節は関係代名詞でなく他の方法で表すべき表現であることを学習者が判断できることになる。このように、空所を含む英語の関係代名詞節の構造理解が確立できていれば、自由英作文等の自己表現においても、少なくとも関係代名詞の使用の可否を判断できる。その段階まで達してはじめて、関係代名詞に関しては「使える英語」に大きく近づくと言えるのではないだろうか<sup>8</sup>。

また、Yule (1998) によれば、目的語に接続する関係代名詞節よりも主語に接続する関係代名詞節の方が難しく、その理由は、前者の場合、主語とそれに対する述語動詞の文中における物理的距離が離れているためであるという。本論の導入方法によれば、関係代名詞節が主語に接続する場合でも、主語名詞句

全体が視覚的に囲まれているので、「後置修飾」の概念さえ理解できれば述語動詞との結びつきは比較的「見えやすい」と思われる。

## 5 現代英語における關係代名詞の分布と授業における取り扱い — 中高連携の視点から

前節で目的格の關係代名詞として whom を導入したが、本節では、中学校で敢えて whom を導入する意義と、本稿ではこれまで扱ってこなかった、關係代名詞 that について、その使用実態を踏まえて議論する。

whom については辞書や文法書等で次のような説明がなされている。

- (25) a. 昨今では、whom は、書き言葉や堅い言い方に限られ、会話では、目的格でも who[that] を用い、しかもこれは省略されるのがふつうである。  
(綿貫・淀縄・Petersen 1994, 179)
- b. whom の形は、「前置詞 + whom」以外では、通例用いられず、代わりに who が用いられる。  
(安井 1996, 250)
- c. *Who* can be used as an object in identifying in an informal style.  
(Swan 2016, 236)
- d. **Whom** is used in formal or written English instead of 'who' when it is the object of a verb or preposition.  
(*Collins Cobuild English Dictionary for Advanced Learners*)
- e. people in formal styles or in writing; often with a preposition; rarely in conversation; used instead of *who* if *who* is the object<sup>9</sup>  
(Cambridge Dictionary)

この記述からも、通常は who を用いるのが一般的であることがうかがわれる。しかしながら、高校で学習する内容には次のような例が含まれており、この場合、whom は who で置き換えることができない。

(26) a. That is the pilot with whom I have long been acquainted.

(安井 1996, 250)

b. These papers belong to Bernard, with whom I am sharing a room.

(綿貫・淀縄・Petersen 1994, 179)

置き換えることができない理由は、おそらく隣接する前置詞が目的格を強く要求するためであると考えられる。ここでも格の問題に遭遇することになるので、この用法を正しく使えるようにするためには、結局、格関係についての確実な理解が必要となる。また、関係代名詞が書き言葉で用いられることが多いという事実からも、高校まで全く whom を教えないというのは現実的ではないだろう。そうであれば、代名詞 him や them と形態的類似性を持つ whom を中学段階で導入しておくことが、高校段階での混乱を減らすことにつながり、よりシステマティックな理解につながるのではないだろうか。whom の導入によって中学時点において格の概念が理解できれば、高校で学ぶ (26) のような「随伴 (pied-piping)」や、所有格の関係代名詞 whose、ひいては格を持たない関係副詞との違いに関する理解も大きな支障なく得られるのではないかと思われる。さらに、複合関係代名詞についても、名詞的な用法と副詞的な譲歩を表す用法の区別が理解しやすくなると考えられる。

次に、本論ではここまで扱っていない関係代名詞 that について考える。石川 (1999) は中高の教科書、文法書、および自身で作成した 6 万語からなるアメリカの時事英語コーパス調査に基づき、次の結論を導いている。

(27) 現代の米語においては、かつて Fowler<sup>10</sup>が主張したように、制限節では that のみ、非制限節では which のみ、という新しい語法基準が確立しつつある可能性が浮かび上がってきた。しかしながら、ごく最近になって現れた吉田 (1999) などの例外を除けば、こうした新しい傾向に対して、既存の文法学はほとんど目配りを行っていない。一方で、我が国の

中高教科書は、それに積極的に対応するものと、従来型の文法規範を遵守しようとするものとに二分されている。

ここで、再び英語教育の現場に立ち返るならば、こうした矛盾する立場の並立は、いたずらに学習者を混乱させるものであると言わねばならない。現代の英語教育が、あくまでもコミュニケーションを標榜しようとするならば、我々は、ディスコースの外部から内部へ、言い換えれば、文法から語法へと指導の視点を転換してゆく必要があるだろう。whichに関しても、現代の標準的英語におけるその用法をふまえた、新しい指導指針の確立が早急に検討されるべきである。

アメリカ英語における which と that に関して石川の指摘する事実からすると、which の制限用法に関しては that で置き換えてしまっても良いように思われるが、その場合でもやはり who と whom の問題は残る。また、(27) がアメリカ英語に当てはまるとしても、英語を母語あるいは公用語とする他の国や地域でもそれがそのまま当てはまるかどうかは定かでない。さらに、世界の様々な地域の人々とのコミュニケーション手段としての、第2言語としての英語という観点から考えると、石川が指摘する内容は学習過程のどこかで扱う必要はあるかもしれないが、少なくとも現時点ではあくまで付加的情報という扱いが妥当であると考ええる。

また、that の導入について、片桐・田路(2018)は次のように述べている。

(28) that は OE からの残存物であり、その指示代名詞としての起源から、complementizer (補文化辞) として、RC だけではなく、例えば、I know that John is a criminal. における that や、(中略) いわゆる同格節を導く that としても使用されている。その多機能性ゆえに、英語学習者は that を使いたがるが、その頻度の高さを度外視してでも、RC 学習初期段階における that の導入は避けるべきであろう。

本論も基本的に片桐・田路（2018）と同様の立場に立つ。実際、これまでに授業等で接した中高生や大学生に尋ねてみると、中学や高校では「分からなかったらとにかくテストではthatを入れておけ」といった指導を受けたとの声も多いように感じられる<sup>11</sup>。そのような指導は、空所や格といった関係代名詞の核心とも言える部分の理解を妨げる。さらに、高校になって格を持たない関係副詞を学ぶ際に、格の有無に関する混乱がさらに大きくなるものと考えられる。

## 6 結語

本論では日本語の連体節と英語の関係代名詞節の対応を考えた上で、関係代名詞節を伴う名詞句および格の理解の重要性を主張し、中高の連携も踏まえた上での具体的な教授モデルを提案した。

関係代名詞は、筆者を含めて、これまで多くの学習者や指導者を悩ませてきた文法事項であると思われるが、日本語に明示的な関係代名詞が存在しないことや連体節との関連で混乱が生じること、日本語は項を必ずしも明示しないので空所や格の理解が難しいこと等が原因として考えられるということはこれまで述べてきた通りである。

そもそも、ある言語Aの表現を英語をはじめとした外国語（言語B）で表すということは、言語Bの文法システムの枠内で言語Aの表現の意味するところの近似値を得る作業に他ならない。そのためには取りも直さず言語Bの文法システムを理解していなければ適当な近似値が得られないのは自明のことであろう。日本語の連体節と、関係代名詞節を含んだ英語の関係節の間には、その部分を司るそれぞれの文法システムの中身にかなり大きな隔りがあると言えるだろう。しかし、逆にいうと、それは（日本語とは異なる文法システムを持った）英語という対象言語のしくみに学習者が直接迫ることのできるチャンスであるとも考えられる。もちろん、他の文法事項にも言えることであろうが、ともすれば「日本語訳」や「英訳」を求めがちな学習者に対して、どのような教授

法でアプローチしようとも、その言語のシステムそのものをどこまで理解させることができるかが指導者として問われているのではないだろうか。

### 【注】

- 1 ただし、「に」の場合、後述するように「昨日ケンが会った女性 (the woman who(m) Ken met yesterday)」のように関係代名詞を使ってそのまま表現できるものもある一方、「ケンが本を借りた女性 (the woman who(m) Ken borrow a book from)」のように前置詞を補わなければならない場合も多い。
- 2 寺村 (1980, 1981) の用語では「内容節」となっている。
- 3 the cause of the fire spreading のように、関係代名詞を用いなくても可能である。
- 4 how の場合は、This is the way he has learned English. あるいは This is how he has learned English. のように the way か how かのどちらか一方のみを表出しなければならない。
- 5 本論は、接触節の導入に関して、牛江 (2013) と同様に関係代名詞の学習後に導入するという立場を採る。
- 6 中岡は「連結」としているが、本稿では「結合」とする。
- 7 「後置修飾」について、木村・金谷・小林 (2010) は、中学生において (ia) の前置詞句による後置修飾は比較的習得率が良いのに対して、(ib) の不定詞による後置修飾に関しては中学卒業時点でも習得できていない学習者が多いことを指摘している。
  - (i) a. two cakes on the table  
b. a large park to play baseball関係代名詞導入の補助として既習の「後置修飾」を提示する必要があるれば、(ia) の前置詞句による修飾に伴う名詞句形成の例を提示した方が良いと思われる。
- 8 もちろん、第2節で扱ったような日本語における「内の関係」と「外の関係」の区別を理解させた上で英語の関係代名詞節を導入することも学習方略の可能性としては考えられる。しかしながら、そうなると日本語についての説明が多くなり、その上で学習者に英語の関係節の理解も課すことになってしまうので、学習者の負担の観点からあまり現実的ではないと考える。
- 9 <https://dictionary.cambridge.org/ja/grammar/british-grammar/relative-pronouns>
- 10 Fowler (1926) を指す。
- 11 あくまで学生にとっての印象もしくは記憶であり、筆者も具体的調査を行ったわけではないので、このことを裏付けるには客観的な調査が必要であることは言うまでもない。

【参考文献】

- 石川慎一郎 (1999). 「コミュニケーション型英語教育における語法指導－教科書と時事英語に見る、関係代名詞 which の制限節内使用について－」『静岡県立大学短期大学部研究紀要』13-1, 31-44.
- 牛江一裕 (2013). 「中学校英語教科書における文法記述と語彙導入の問題点：Sunshine English Course の場合」『埼玉大学紀要, 教育学部』62 (1), 175-190.
- 片桐史恵、田路敏彦 (2018). 「名詞修飾節の日英対照研究」『中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究』3 (2), 97-103.
- 金谷憲 (2007). 「文法の定着をめざして」『UNICORN JOURNAL November 10』文英堂
- 木村恵、金谷憲、小林美音 (2010). 「日本人中学生の英語名詞句構造の理解過程：縦断的調査による実態把握と判別力の検証」『関東甲信越英語教育学会研究紀要』24, 61-72.
- 齋藤浩美 (2002). 「連体修飾節の習得に関する研究の動向」『言語文化と日本語教育－第二言語習得教育の研究最前線－あすの日本語教育への道しるべー』日本言語文化学会研究会, 45-69.
- 田丸淑子、吉岡薫、木村静子 (1993). 「学習者の発話に見られる文構造の長期的観察」『日本語教育』81, 43-54.
- 寺村秀夫 (1975). 「連体修飾のシンタクスとその意味－その1－」『日本語・日本文化』4, 大阪外国語大学留学生別科 (寺村 (1993), 157-207に再録)
- 寺村秀夫 (1980). 「名詞修飾部の比較」國廣哲彌編『日英語比較講座－文法二』221-260. 大修館書店.
- 寺村秀夫 (1981). 『日本語の文法 (下)』国立国語研究所.
- 寺村秀夫 (1993). 『寺村秀夫論文集－日本語文法編－』くろしお出版.
- 中岡典子 (2006). 「英語教授法に関する一考察：関係詞節導入の実践例：第5回短期大学英語教育研究会事例発表より」『東京立正女子短期大学紀要』34, 132-160.
- 宮木慎 (2013). 「高等学校検定教科書分析から考える関係代名詞の指導法：従来の指導法からの脱却と新提案」『神奈川大学大学院言語と文化論集』19, 197-232.
- 安井稔 (1996). 『英文法総覧』開拓社.
- 吉田正治 (1999). 「制限用法の関係代名詞 who と that, which と that は自由変異なのか」『英語青年』1999年9月号, 10. 研究社出版.
- 綿貫陽、マーク・ピーターセン (2006). 『表現のための実践ロイヤル英文法』旺文社.
- 綿貫陽、淀繩光洋、Mark F. Petersen (1994). 『教師のためのロイヤル英文法』旺文社.
- Fowler, Henry, W. (1926). *A dictionary of modern English usage*. Oxford University Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. (1985). *A comprehensive grammar of the English language*. Longman.
- Swan, Michael. (2016). *Practical English usage*, 4th edition. Oxford University Press.
- Yule, George. (1998). *Explaining English grammar*. Oxford University Press.



教科書・辞書・学習参考書等

『学研パーフェクトコース中学英語』(2008). 学研教育出版.

『高校総合英語 Harvest (ハーベスト)』(第3版)(2008). ピアソン桐原.

『ジーニアス総合英語』(2017). 大修館書店.

『Depth 総合英語』(2002). 河合出版.

『New Horizon English Course 3』(2018). 東京書籍.

*Cambridge Dictionary*. (<https://dictionary.cambridge.org/ja/>)

*Collins Cobuild English Dictionary for Advanced Learners (third edition)*. (2001). HarperCollins Publishers.

